

第1回おだわら森林ビジョン策定検討委員会 議事録

開催日時	2020年7月3日（金）14：00～16：30
開催場所	小田原市 生涯学習センターけやき4階 第2会議室
出席者	参加者総数：22名 ○内訳 委員：13名（委員長1名、副委員長1名含む） オブザーバー：1名 事務局：8名
議 題	(1) おだわら森林ビジョンの策定の趣旨 (2) 基礎調査について (3) おだわら森林ビジョンの基本構想について (4) プロジェクトの提案について (5) その他

【事務局】

（挨拶）この森林ビジョンは、50年、100年先を見据えた中で森林のあるべき将来像や取組の方向性などを定めるもの。森林の育成には大変長い期間を要するゆえ、長期的計画あるいは実践的な取組が求められてくる。

本市では、これまでおだわら森林・林業・木材産業再生協議会をはじめとして、水源林の整備や地域産木材の活用、森林環境教育の実施など、様々な取組を進めてきた。本日お集まりの皆様におかれましては、こうした様々な場面で多大なる御尽力、御協力をいただきたく、改めましてお礼申し上げます。

このビジョンについては、昨年度に基礎調査並びに関係者にヒアリングを実施。本年度は来年3月末までに、このビジョンをまとめ上げていく運び。大変短い期間で恐縮だが、皆様方におかれましては、忌憚のない御意見、御検討をいただき、次世代へとつながる森林づくりに向け、格別の御協力と御指導を賜りたいと思っている。

--委員挨拶（関係者含）--

**【事務局】**

委員長及び副委員長について、事務局案として委員長をA委員、副委員長をB委員と考えている。（「異議なし」の声あり）

**【A委員長】**挨拶

**【事務局】**配布資料の確認

--以下より議事--

**【A委員長】**

5つの議題有。今日は基礎情報等、(1)から(3)説明いただいた後、議論に入っていく。(1)から(3)について事務局から説明願います。

**【事務局】**

昨年度に基礎調査を実施し、今年度は本番の策定を行う。皆様と議論を交え委員会の中で策定を進めていきたい。

(おだわら森林ビジョン策定の趣旨について説明。資料1参照)

ビジョンの構成と期間について補足。基本構想、基本計画、実施計画と構成しており、ここで50年、100年と示してはいるが、短・中期的に目標を見据え実施していく必要がある。計画期間は10年、5年とし、具体的なところは実施計画のところを示していく考え。今回は、基本構想（森づくりの方向性）について、この場で議論いただき、具体的な事業については、2回目以降に基本計画、実施計画で議論願いたい。

続いて、昨年度の基礎調査の概要を説明。

**【事務局】**

(基礎調査について説明。資料2参照)

小田原市のアドバンテージについて、補足。教育施設、木育の展開について非常に感銘を受けた。こうした事業を展開している市町村は非常に多いが、小田原市はプロセスを非常に大切にしている。例えば、子供達が木工家やデザインの方と共に、どんなものを作り

たいかという基盤の部分から議論し、新しいことを考えていくとう点。他地域でこうした例がなく、小田原市は木育の先進地としての可能性を秘めていると考える。

ビジョンについて補足。木材生産能力のポテンシャルそのものを考慮すると、現在の日本（林野行政の主流）で大規模化へ向けた展開は困難。ただし、地域材を活用する事は別。地域材活用を高めるために都市近郊林だとか木育だとか、そうした新たな経済的価値を訴求する必要があり、小田原市にはその土壌があると考え。一方、乱開発とかそういった中で守るべきものをゾーニングで明確にする必要はある。ただし、森が育つには非常に期間を要するゆえ、多様性のある森林を育てましょうと議論するのは確かだが、その森林を管理する人々、それを使用する人々の生活まで含め存続しないと、結果的にこのビジョンは機能を果たさなくなる恐れがある。ここは最も注意すべきと思っている。

#### 【A委員長】

基礎調査の説明が終わりました。小田原森林ビジョンの基本構想について、説明をお願いします。

#### 【事務局】

(小田原森林ビジョンの基本構想について説明。資料1参照)

#### 【A委員長】

今日の議論の中身は基本構想である。基本計画と実施計画については次回以降。小田原の森づくりの基本的な方向性についての議論をしたい。

事務局より提案された4つのビジョンについて説明がありました。字句等での質問有無の確認。(特に質問なし)

方向性について、可能性や過不足について議論をいただきたい。

#### 【C委員】

4つのビジョン、基本的に良いと思う。加えるならば以下3点。エネルギーの産出、水、森そのものに携わる人材の育成。

エネルギーの創出について。昔は日本のエネルギーのほぼ全てが里山から出ていた。それが石炭になり、石油になり、原子力へ変化したが、エネルギー創出は山や森林の役割で

はないのかというのを、入れておいたほうが良いのではないか。

水について。人間生活を支えるいい水を出すことが山の役割。いい水を出し、その水をいかに利用するか。加えて、その水が悪さをしないように治山治水をする。この3つから、水というものを1つのビジョンの中に入れてほうが良いのではないか。

森そのものに携わる人材の育成について。使う・交流する側としての人は出てくるが、森林そのものに携わる人材というものをどう育成していくかということも、1つのポイントであるのではないか。

#### 【A委員長】

暮らしの中にはエネルギー問題、水の問題、安心安全な地域社会、加えて豊かな暮らしがあり、そこにバイオマス問題や防災を加え、水も加える事で総合的に地域を見る視点となる。森のプロフェッショナル、これは強靱な森林づくりあるいは木材生産や利用などということから非常に重要な視点。どこかに入れていただけたらと思う。

木材利用についてはどうか。

#### 【D委員】

学校の木質化は3年目。もっと増やしたい。一番目につくところであり、積極的な展開を願う。

#### 【A委員長】

小田原は大分進んでいるが、より積極的に木材を使い、子供たちにそれを体験してもらう事で教育の一環になると思う。

木材利用や製材の部分についてはどうか。

#### 【E委員】

プロフェッショナルな人材について。本物の職人の数が減っている。職人を育てる環境も少なく、製材できる職人や木こりも不足し、伐採・造材に技術不足を感じる。経験値が必要な産業ゆえ、携わる人のスキルアップができる環境を整える学校が必要に思う。製材業者を増やす事、そういったところも盛り込んで欲しい。

#### 【A委員長】

木の使い方により、その価値は上がる。木づくり、木づかい。この専門家について、どこかに入れること要検討か。

#### 【F委員】

この10年間、木育と称し子供たちを主体として活動してきた（体験を通し、今後の豊かな森につなぐため）。今後は以下を目的とするような、大人の木育についても展開が必要に思う。木を使う理由（なぜ木づかいをする必要があるのか、なぜ木が必要なのか）、森と接する理由を知るため。これを知ること、首都圏に近い小田原の森はとても意味があるものになると思う。

#### 【A委員長】

一般に市民にとって森というものに対する価値観があるようでない。立木から材になり部品になればそれが木材という事ではなく、本来木材は無垢の材を賢く活用する中で商品としての価値があった。その木材の使い方により人間の感性や創造性など暮らしと結びついていた。

そのような視点からすると、小田原の森＝市民の森、共通の財産であり、そこには教育や遊び、伝承あるいは地域づくりなど基本的なものがいっぱい入っており、それが学びになり伝統が生まれてくる。そうした大きな位置づけの中に4つのビジョンを考慮することにより、小田原の自然や環境問題あるいはエネルギーや産業そして暮らしなど全てに関わることとなる。

#### 【B副委員長】

農村づくり、都市と農地を結ぶ、山と市民を結ぶ、そうした際に1つの5原則がある。「遊ぶ森、働く森（一生懸命山をつくる）、助け合う森（みんなで応援し合い助け合う援林）、学ぶ森（森から学ぶ）、楽しむ森（森を楽しむ）」これがつながると、都市と山の人のつながりが必ず出てくる。この5原則に1つの流れをつくるとわかりやすい。

ビジョンについて、(1)市民の安全・安心を守る小田原の森、安全・安心について、もう少し具体的に示す必要があるのではないか。水やエネルギーについて、架空的な安全・安心という言葉は一般的過ぎてインパクトがない。森のおかげで小田原市は水不足に陥っ

た事がない等、具体的に示してはどうか。どういう事が安全で安心なのか。市民に関わるような示し方が必要。その背景に先程の5原則がつながると、より具体的なものが見えるのではないか。人材育成の問題について、(4) 市民とつくる小田原の森、ここへ森に携わる人達の育成等、具体的な項目を何項目か入れてはどうか。(2) 多様な生物を育む小田原の森、言葉としては綺麗だが、これについても具体的に示す必要があるのではないか。どういったところを指し、どう始めていいかが読み取れない。

#### 【A委員長】

この4つのビジョンをまとめると、5つの原則が出てくる。それを具体化していく。それを図面にするとわかりやすいのではないか。例えば、人間の生涯を1つの横軸か縦軸にし、そこにこのビジョンを重ねる。その努力を事務局に願いたい。具体的な話は今後の実施計画にて詳細に落とし込めたらと思う。

#### 【G委員】

20年前に森林ボランティアとして小田原山盛の会を立ち上げた。

5、6年前からシカの調査が増加傾向にある。猛烈なスピードでシカの生息密度が高まり、山の荒廃も進んでいる。これに伴いダニが大量発生中。いこいの森の中でも、クヌギの森など子供たちが遊ぶ草地や、テントサイトのすぐ脇でマダニ数種類がすぐに捕れる状態となっていて心配している。

増加する獣害問題で山の荒廃が急加速中であり、森林生態系の劣化や、水源林としての森の機能の低下など、色々な問題が発生する為、重点的に問題解決に取り組む必要がある。こうした内容を木育の中にも盛り込み、獣害対策に取り込んでいただきたい。新たに始まる小田原くくり畷塾は、獣害対策の先進的な取組となる。小田原市の取組として大きく取り上げても良いかと思う。

#### 【A委員長】

全国的な問題になっている獣害対策。例えば、小田原方式として、くくり畷塾については、珍しく先駆的である。こうした鳥獣害や鳥獣保護との関わりが小田原の暮らしと学びの中に入っているという側面を前面に出し、具体的な問題は計画の中に入れ込む。その際大事なのは広域的に連携して取り組むことが重要で、広域的に実施する旨を踏まえて加え

ておく和良好的ではないか。

--市長到着（挨拶とお言葉）--

**【守屋市長】**

小田原において、この森林再生（環境保全）に対する取組は、多くの先人たちの御努力により、県内でも特筆すべきレベルに成長してきたと捉えている。

市長就任前は28年間、県議会議員として、環境と農政に関する課題に取り組んできた。また、県の水源環境保全税を使った県全体の森林再生、今は森林環境譲与税も加わり、いただいた税金をどう生かしつつ、県産材、そして、小田原の森林を再生していくということは、今を生きる私たちはもちろん、後世にちゃんと引き継いでいくべきものだと大変深く受け止めている。ただ、本当に大変難しい作業であり、私たちの願いとは裏腹に、森林の環境というものは、放っておくと、いい方向には残念ながら流れない。

では、我々人間がどういう英知と、そして、限られた資金を使って保全に取り組んでいくか。私は、小田原はそういった意味では様々な方がプレーヤーとしているということが何よりも大切だと思っておりますし、また、それが小田原の強みだと思っている。

他の自治体を比較するわけではないが、特定の活動をしている団体にある意味負荷がかかり、その活動自身が持続可能ではないという場面を見てきた中を考えれば、本当に、今日集まっていたいただいている皆様をはじめとして、皆様が関係している団体以外の方も含めて、この小田原にたくさんのプレーヤーがいるということは、この小田原の強みだと思っている。

私の経験として例えば丹沢の再生の中で、実施できたこと、できなかったことという反省点も踏まえ、また、その知見も生かしながら、この小田原、そして箱根山地、この森林をどう保存するのか。特に、今までやってきた川上から川下につないでいくという取り組みに加えて、さらに、生物多様性であるとか、生態系の保全なども、これから新たに求められてくるキーワードではないのかなと承知している。

--市長退室--

--議事再開--

#### 【A委員長】

ビジョンの中に環境問題や緑問題あるいは教育問題など様々な要素を入れておくことが大事。林業経営面ではどうか。

#### 【H委員】

小田原山林の現状は、枝打ちの関係で、木材の質が落ちているものが大半である。枝打ちの作業をしてきた方もいるが、しなかった方が大半である（森林所有者さんが山への関心がなくなってしまった関係か）。枝打ちをしてきた良質な木材は、良質な木材として使われるべきところに使っていただき、低質木材に関しては、公共的な事で使っていただけるような（学校の木質化で徐々に使われてきている感はある）、山林の中に多量に資源がある為、利用拡大について盛り込んでほしい。

また、今後の植栽の樹種に関して、スギ・ヒノキが妥当であるのか、成長の早いセンダングヤコウヨウザンなど多樹種への転換についても検討が必要なのか考えている。その点についても盛り込んでいただきたい。

#### 【A委員長】

恐らく、ゾーニングに関わってくると思う。森との付き合い方あるいは木を使う文化と  
いった際、スギ・ヒノキだけではなく、従来の木材利用プラス新しい暮らしと木材という  
ような、そういう表現が必要か。

#### 【I委員】

現在の神奈川県において木材流通の関係では、建築用材のA材が慢性的に不足。逆に、  
食害された材は、県内では流通しきれず80%ぐらいが県外の合板工場に流れている状態。  
願いは2つ。県外への流通は運賃がかかり、森林所有者の方々への還元が薄くなる。県外  
流通分を小田原市や神奈川県にて使用できたら森林所有者の方にも還元できる為、木材流  
通が県内で循環できる事を願う。ゾーニングについてはキーワードを明確にし、小田原市  
独自のゾーニングに生かしていただきたい。（キーワード例：木材生産、公益性の高い多種  
多様な森林、樹種の転換）



### 【A委員長】

以前、辻村さんのところでユリノキの使い方が課題だという話があり、別のところ（製材所）へ行くと、そんな話があるのですか・・・という山側と加工側の情報がつながっていないことがあった。この事からも、木づくり、森づくりと木づかいまでをつなげる事が大切であると考えます。現状、副委員長が紹介した5原則というものが日常の暮らしや社会活動の中で切れている。かつて、里山文化というのは、全てつながった1つの社会を形成していたが、いつの間にか、畜産は畜産、農業は農業、林業は林業という専門に分けられ、つながりが切れた。これと共に里山のコミュニティも切れ、一緒に山づくりをしたり、森づくりをしたり、道づくりをしたり、あるいは、獣害を駆除したりした共同の場面、一番大事な地域のコミュニティが切れ、結果的に行政に任せる事となり事態は悪化していく。つなげるという意味でも、5原則とゾーニングを検討する必要がある。

### 【J委員】

自分は地区の自治会連合会という形で、日常を見ている。地域の森に対する関心はあるが、PRに不足を感じる。馴染みがないと身近に感じない。

学校における木育教育により環境教育については不足なく感じるが、森林関係に関する教育には不足を感じる。土砂災害等、災害時にのみ森林に注目するのではなく、根本からなくす基礎的な事が大切であり、長期的な視点を持ち、自然を愛する心、山を愛する心、そうした想いを育む教育が必要ではないか。

木材利用については、有効に使用して欲しい（箱根国道中のガードレールが小田原材だと聞いた事があり感銘を受けた事がある）。

行政と自治会組織（自治会を通しての個人）も連携を持ち密でありたい。

### 【A委員長】

PR不足について。小田原市のホームページ等で、森ナビのようなものを設けてはどうか。市民が自由に参加し投票でき、常に情報が市民間を往復するような。そうしたものがあれば、改善される可能性がある。

### 【K委員】

私たち一般にも分かりやすいような5原則の言葉に共感。

フィールドワークや座学を通し、子供と共に森について学ぶ機会というのが、学校にも外にも欲しい。子供たちにももっと体験させてあげたい。山北町に「おとなの木育」というシリーズ化されている事業がある。小田原にもあると良い。学校でも教育がなされ、座学、フィールドワークの後に、自分達でどう感じ、これからどうしていくかということを発表する場所があったらいい。

小田原のSDGsモデル事業に深く関わる事が示せば、皆が色々と参加しやすくなるのではないか。知って森に感謝したくなるような、そんな教育を子供たちにもして欲しい。

#### 【A委員長】

SDGsの視点から、行政をはじめ私たちの暮らしが大きく転換していく時代にあるが、それが非常に分かりにくい。SDGsとの連携をこの活動の中で取っていく際は、わかりやすく表現する必要がある(具現化)。ビジョンは可能な限りわかりやすい言葉で表現していくことが大切である。

#### 【L委員】

私は木材利用者で、小田原漆器の製造をしている(関西より12年前に小田原に移住)。昔(12年前)は小田原市内にも漆器専用の製材屋さんがあったが、漆器や小木工に関して従事者が減り、小木工に対しての製材屋が小田原内になくなり、現在は県外の方をお願いしている。寄木細工の生産者は大体静岡から木を買っているというのが現状。

製造に関して、小田原の特徴として以下がある。経済産業省が指定している伝統工芸品というのが小田原市には2つあり、それが両方、木に関わるものである。箱根寄木細工(畑宿以外ほとんどが小田原作)、小田原漆器。この2つである。

日本中の木材伝統工芸品は沢山の県に存在するが、1つの市の中に2つあるというのは10か所もない。他産地だと仏具や箆笥等、日常的ではないもの(土産としては買って帰れない)が多い。小田原市には手に取りやすい木の工芸品が2つもあるのは差別化できる。森とつなげて考える際、良いツールになると思う。

小田原漆器を作るに当たっては、小田原産だと答えられる日がくる事を願う。加えて、漆を塗る者として、現状漆の産地は97%が中国産、3%だけが国産。小田原で漆が育ち、それを使える日がくる事も願う。

### 【A委員長】

伝統工芸として国や県などに指定されると、何か衰退した産業に見えることが少なくないが、地域の中における誇れるものとして絶対に残すべきであるといった認識が大切。また、それらは、子供たちの教育にも向いており、叶うなら教育現場で漆器を使用できると良い。そのようにつながりを持つという、これは非常に重要なところだと思う。

### 【M委員】

自分は丹沢大山の自然再生に関わっている。丹沢と異なり小田原市の森というのは、利用してきた森が多いと感じている。標高1,000メートル超がほぼなく、人工林が7割を占める。そうした意味で、ビジョン2つ目に多様な生物を育む小田原の森と掲げてあるが、広葉樹林への転換というのは良いと思う。

広葉樹を植えるに当たり、例えば丹沢の場合、広葉樹林というと、環境林や天然林にしていくというような発想になりやすいが、小田原の森づくりに当たっては、以下のように一石二鳥を求めても良いのではないか。木材利用を意識した樹種選択。一方で、郷土の森・常緑樹の森など環境林。

森づくりに当たっては、50年、100年先のことを意識すると、2つ危惧しておく必要がある。1つは、鹿である。かつて日本の山は伐採し放っておけば森になるという、世界的にはとても恵まれた国だったが、これからの日本はそうはならない。伐採したら鹿が増える可能性がある（本日そうした話もあった）。鹿や獣害を意識した森づくりに対し費用が嵩む点について意識が必要である。

もう1つは、地球温暖化の影響である。100年先は平均気温が2度上昇すると言われている。2度というのはかなり楽観的予測で、4度上昇するという話もある。2度というのは、高さ、垂直の分布で300メートル環境が変わる。例えば標高1,000メートル程のところにはブナがあるとすると、そのブナは厳しい環境に置かれる事となる。小田原、箱根周辺は降水量が多い点からも、温暖化の影響により豪雨災害が予測される（年降水量は変わらずとも、豪雨が極端化する可能性がある）。

環境の変化に強い、しなやかな森づくりを目指す必要があるのではないかと考える。

### 【A委員長】

国連では、グリーンエコノミーやグリーンインフラという言葉が最近使われている。グ

リーネコノミーは、多様な森林と多様な産業の連携。環境に優しい循環型社会。グリーンインフラは、生態的に適切に対応した森林ほど丈夫であると示されている。こうした観点から、昨今の変化する環境を配慮しつつ、今ある森林をどう強くするのかは課題である。ゾーニングをすることによって、状況を明確にし、狙いを定め適格に対応する事が必要。これについては今後議論するべきである。

#### 【N氏（オブザーバー）】

マッチングは重要。マッチングという概念を入れてはどうか。いかなる事にも共通すると思う。

#### 【A委員長】

マッチングによって多様なセクターや技術、あるいは人と人、ものともものなど、色々な連携が可能となる。そこに新しいものを生む、あるいは再構築を行う。重要なキーワードである。

議論の中で、大体このビジョンというのは4つの概念が出てきたが、その中に幾つか心を入れてくれという意見が多かった。例えば、遊びの心やマッチング、ゾーニング、エネルギーなどの話があるが、それらが持つハートとといいますか、骨子の部分をもうちょっと入れてほしいという議論があったので、それを考えてもらいたい。

もう一つ、生涯という議論があった。幼児から老齢期までにどう森林と関わっていくかというようなライフスタイルを見ると、かなりの部分が遊びという形で繋がったり、木材利用との関わりでは積み木から入っていったりと、いろいろな場面が想像されるが、そのような特徴を明確にすることによって結局小田原は、森と共に生きているという共通の認識が生まれる。

そうした、森や木材との関わりをライフスタイルで示した中で、さらにはグリーンインフラ、グリーンエコノミー、SDGsとの関連が中にしっかりはまり込んでいること、そのことが新しい生活様式と関わって相乗して良い方向が示されるのではないか。このように修正を加えて頂きたい。その他ご意見があるか。

#### 【C委員】

10年、50年、100年という、こうした言葉が使われる事はとても嬉しく、森づく

りというのはまさしくそういうこと。しかし言葉としてはきれいだが、以下があり実際はとても困難である。相続（里山は奥山と比較し相続税が高い）、所有者不明、こうした問題がある。さらに行政側事情（担当者の変更や転勤）等により、山林所有者が意地や義務感で維持しているという厳しい現状がある。これに対し具体的な対策が必要に思う。

加えて、森、林業はマーケティングがないビジネス。先人達はマーケティングとしてではなく地場の流れの中で植樹を行ってきた。成長に時間を有するゆえにマーケティングが困難な特殊産業であり、これは課題である。こうした旨も盛り込み、他地域をも救えるような先進事例が小田原で作れたら良い。

#### 【A委員長】

まさに、日本林業が抱えている大きな課題。具体的に落とし込めるか定かではないが、要素として加えると良いと思う。他国（欧州方面）では、国民の財産は森林であるとし、環境税を設けている（日本円にして1,800億円程度）。徴収理由は国民の健康・環境・そして木材利用のため。木材生産を怠ると、この税金は使わないという方策も入っている。森林に対し市民がどう価値観を感じ、それを守っていく姿勢をどうとるのか。これに関わる。

当面、基本構想の基本理念については、事務局から示された4つに、皆さんからいただいた内容を可能な限り加えて進めていく事とする。

#### 【事務局】

（プロジェクトの説明）

#### 【A委員長】

このプロジェクトについて、ビジョンとの関わりの中で、現状の情報化を行いながら、実行可能なことは適宜実施する。後に、市民に対するPR実施。そうした運びとなる。時期的な事もあり（コロナ事情含）、全て実現可能かは定かではないが、プロジェクトとして実現したい事の提案である。

#### 【G委員】

馬による森づくりは素晴らしいアイデア。ぜひ実現して欲しい。加えて、小田原は良い

職人が沢山いるので、そり作りや、木馬で軌道を作って人力で出す等、小田原の木材で作成し、実際に展示や体験できる機会があると、より一層面白い。

**【A委員長】**

この体験は、体験型で施設設置してはどうか（いこいの森みたいな場所で、固定施設としての提案）。運び出した材がどう変化し、どう使われ、運び出された場所は後にどうなるのか、季節も含めた流れ（全体の循環）が体験できるような場所にしたらどうだろうか。

**【M委員】**

森林データベースの構築について。今後の森づくりのゾーニングのためには、必要不可欠であると思う。是非実施願いたい。使用データについて。環境省の生物多様性センター作成の植生図には、どこに何林があるのか確認できる。小田原市作成の動植物分布調査データについても使用するという事か？

**【事務局】**

仰せの通り。使用可能なデータは全て使用する予定。それを重ねるための基本となるベースを整備したいと思っている。植生図をはじめ、例えば防災の面だと日本全国の地滑り等を示したデータ（公開されているデータ）を重ねてみる等も実現可能かと思っている。

**【M委員】**

生物多様性という意味では、希少種の分布情報を取得できると良いと。小田原の入生田にある生命の星・地球博物館で、現在レッドリストを編纂中。公開は不可能かもしれないが、小田原市を通しデータ連携できれば良いと思う。検討願う。

**【事務局】**

データ精度が上がると公開範囲について考える必要がでてくる。そこはまた議論の中で精査していきたい。

**【M委員】**

小田原のスギ・ヒノキの人工林には、意外とシダ植物の希少種、絶滅危惧種が沢山ある。

日本の分布の北限、東限になっている種も幾つか存在する。人工林は全て手入れをするというのが大前提だと思うが、多少の配慮が必要か。そのためにも希少種データはあったほうが良いと思う。

**【A委員長】**

基礎データに加え様々なデータが加わるのはとても良い。情報収集は必須。森の履歴書のような、現在に至るまでの森の変化が確認できるようなものがあると、現地の歴史を知る意味でも良いのではないか。検討願いたい。

**【G委員】**

伐採履歴を図化しエリア毎に確認できると面白く、将来の小田原を考える一つの手立てにもなる。

**【H委員】**

今の話の続きとなるが、平成24年から長期施業受委託という事業を進めており、GISによって施業した場所の区域を図上に示すことが可能。平成19年から小田原市で進めてきた水源林の協定施業代行という事業の履歴に関しても、整理中。期間として短期間ではあるが、現在の整備状況は示せる。加えて、それ以前に施業してきた履歴が紙ベースである。これらもデータ化し財産として残していきたい。

**【A委員長】**

管理した歴史を残す事は大切。材を売る際、枝打ち時期等を示す証拠となり、材の価値を上げることができると思う。小田原の森林価値を上げる事にもつながる為、取り入れていただけると良いと思う。

**【F委員】**

我々が小田原の木を紹介する際、海も一緒に紹介するのだが、森と海が連動している事も意識し、森の重要性を示せると良い。

### 【A委員長】

これも小田原ならではの。昔から海との連携はあったと思う。船にしてみたり、魚の箱にしてみたり、みかんの箱にしてみたり、農業との関わり、漁業との関わり、そうしたものが想像できる。可能であれば、そうしたデータ収集もできれば良いと思う。海とつなげるというのは大事な視点である。

プロジェクトに関しては、この4つを展開していき、将来的に海や意見のあったデータの件について検討していく。

### 【事務局】

G委員からの配布資料について紹介願います。

### 【G委員】

山盛の会では6年前から鹿の調査を開始。着手当初はまだ軽微であった影響も、現在は箱根山地の丹沢に近い外輪山北部や、静岡県に隣接する西部から徐々に植生劣化が進行しており、小田原エリアでも稜線部付近は部分的に裸地化や、植生の単純化が始まっている。

これに伴い、去年からダニの調査も開始。箱根山地のダニの分布状況を確認したところ、鹿の多いエリアでフタトゲチマダニが多い事が判明（九十何パーセント占める状況）。

一方で、今、静岡県では、日本紅斑熱を媒介するヤマアラシチマダニという種類のダニ、南方系のダニが分布を広げている。徐々に小田原に押し寄せ、湯河原町、熱海、伊東等で紅斑熱の患者さんが何人も出ている。昨年からの調査では、早川や荻窪のイノシシ捕獲個体からヤマアラシチマダニが採取され危惧している。

冊子は去年の調査で、箱根山地でのダニの分布が確認いただける。林業被害の状況についても掲載しており、柵がなくては林業が成り立たない状態となっている。小田原イノシスカネットという団体も立ち上げ、一昨年より捕獲を開始した。捕獲数も資料として掲載している。

明後日（7/5）から開始される小田原くくり罠塾であるが、捕獲者は森を守るレンジャーでもある。今後そのような視点も交えて人材育成をしていきたい。

### 【事務局】

（他の委員さんからも紹介事項等ないか促し）



**【B副委員長】**

このビジョンが小田原市のビジョンと深く関わり合いを持ってもらいたい。大きいビジョンの中に、一つの母体もあるというような位置づけで捉えてもらおうと、非常に範囲が広がる。

次世代へつながる豊かな森林というのは、次世代を継ぐ子供たちやその人たちの心や教育の問題。なぜそうしたものが必要なのか具体的に示すべき。今まで人間は科学と経済で成長してきた。人間の今までの生き方や感性、そういうものを少し見直すべきかと思う。

人間らしさとは何かというものが、この森の中で育まれるという位置づけをしてほしい。子供に便利さを与え成果優先にベクトルが向いている現代。経済原則よりは人間としての生き方、地球人としてのやるべき仕事、それには感性と創造力と決断力が必要。小田原の恵まれた自然環境の中で、なぜこれが大事なのかという理由づけを明言して欲しい。

森づくり、人づくり、それをする理由を捉えてもらいたい。環境を大事にしましょうと言うが、一般人には響かない（どうして良いか分からない）。自然環境の中で楽しんだり遊んだり、そうして初めて、もっと大事にしようという発想が生まれる。自然環境との接点を多く設けることが必須である。その接点を具体的に示したい。

**【A委員長】**

恐らく扉の裏面のところに、ご指摘の具体的な内容について加えるようにしてはどうか。

—議事終了—